

英語オンデマンド授業における授業方法
および学習方法の研究
—TOEIC 模試とアンケート結果から見えるもの—

穴戸 章子・町田 直子・瀧村 裕子・宮城 学

[研究論文] 英語オンデマンド授業における授業方法
および学習方法の研究
—TOEIC 模試とアンケート結果から見えてくるもの—

宍戸章子¹・町田直子¹・瀧村裕子¹・宮城学¹

1 神奈川工科大学 教育開発センター

Research on Teaching and Learning Methods in English On-demand Classes:
—What we can assess from the TOEIC Sample Test and Questionnaire Results—

Akiko SHISHIDO¹, Naoko MACHIDA¹, Hiroko TAKIMURA¹, Manabu MIYAGI¹

Abstract

This study was conducted by four English teachers during the Covid-19 pandemic to improve on-demand English classes for new university students in Japan. The study was analyzed from two angles, teaching methods and students' learning strategies, using a TOEIC sample test and a 13-item questionnaire, which were administered at the beginning and end of the semester. As a result, we found one teaching method with significant differences. Five students increased their TOEIC scores by 20 points out of 100, which indicated that the change in learning strategies was a major factor. In addition, the relationship between the results of 152 questionnaires and the TOEIC sample test revealed several effective learning strategies. Learning methods such as "Trying to analyze the reasons for one's own mistakes" and "Focusing on the situation in which they are used when learning English words," are stronger factors to improve grades. Further studies with larger samples and different sample levels are needed to confirm the result.

Keywords: TOEIC, On-demand Lesson, Teaching method, Learning strategies

1. はじめに

本学における英語教育は、全学共通の共通基盤教育の中の英語基礎系と言語応用系に置かれている。全学生が履修する英語基礎系科目の設置目的は、「国際的なコミュニケーションに必須となる英語教育を強化し、習熟度に応じた科目群を開講し、社会人英語力の指標であるTOEIC® Listening & Reading Test を目標として導入し、実践に強い英語力を身につけること」である。入学時に行われるプレイスメントテストの得点により、1年前期には英語Ⅰ～Ⅲのいずれかのクラスに学生は振り分けられ、4年間で4単位を修得することが卒業要件となっている。シラバスの説明では、英語ⅠおよびⅡの科目では目標得点の表示はないものの、英語ⅢではTOEIC® L&R テストにおいて300点を目標とし、英語Ⅳでは350点、英語Ⅴで400点、英語Ⅵでは450点と、それぞれ目標の得点を挙げている。とはいってもこれらの得点目標はあくまでも授業レベルを示す目標であり、全学生に公式受験を強制するものではない。英語運用能力全般を授業で身に付けることをめやすに授業が行われているのであって、授業内容も、各教員の工夫により、語彙や文法・読解の指導はもとより、発音・英作文・プレゼンテーション作成指導、異文化理解等も含みながら、リスニ

ング・リーディング分野のTOEIC実践問題演習を中心とした授業が展開されている。

2019年度までは対面授業であったが、2020年にコロナ対策として学生の学内入構が制限されるようになると、オンライン授業が始まり、2021年度からは、学生の週2回程度の学内入構を許可するため、英語系列の授業は全てオンデマンド授業となった。

オンデマンド授業は学内で三密（密閉・密集・密接）を避けるだけでなく、週7日24時間いつでも、何回でも、自分のペースで授業を受けられるというメリットがあり、学生にはおおむね好評であった。2021年度前期の筆者の学期末のアンケートでは回答者222名中75.2%の学生が、オンデマンド授業は「よい」と答えていた。一方で、「モチベーションが上がらない」「授業を受けるのを忘れやすい」「質問をその場でできない」等のデメリットの意見も寄せられた。また、教員側からは、「音声指導が不十分になる」「学生への声掛けがしにくい」等の問題点の指摘がされており、試行錯誤しながら授業改善を行ってきた。

2022年後期に向けた今、コロナ株が次々に変異し、短期的には収束しないと予測される状況下で、対面授業にどう戻していくかが課題となっている。

この研究は、いまだコロナの収束が見えていなかった2022年3月、オンデマンドという制約の中で、教育開発

センター所属の基礎教育英語講師4名が、同じ教科書を使い、授業改善に共同で努めようとしたところから始まった。学生達と大学から期待されている「TOEICの得点を上げる」という目標を達成するためにはどのようなタイプの授業が最適か研究してみることとしたのである。

2. TOEIC テストと先行研究について

2.1. TOEIC について

TOEIC の運営を行っている一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBC (The Institute for International Business Communication) のホームページによると、TOEIC とは、全世界で 160 カ国 700 万人の受験する、「日常生活やグローバルビジネスにおける生きた英語の力を測定する、世界共通のテスト」であり、多くの企業の入社試験や企業内キャリアアップにつながる資料として使われている。社員の採用時に TOEIC のスコアを参考にしている会社は多く、新入社員に期待するスコアは TOEIC® L&R 990 点中 535 点とされている。¹⁾ 本学の共通基盤教育で TOEIC の得点を授業目標としているのも、学生の就職活動や卒業後のキャリアアップに有利に働くことを見据えているからである。

TOEIC 試験には何通りかの種類がある。TOEIC® Listening & Reading Test, TOEIC® Speaking & Writing Tests, TOEIC® Speaking Test, 英語学習初級者や中級者を対象とした、TOEIC® Bridge Listening & Reading Test, TOEIC® Bridge Speaking & Writing Tests である。これらの中で本学が目標としているテストは、最も受験者の多い、リスニング約 45 分とリーディング 75 分の TOEIC® Listening & Reading Test であり、この論文で TOEIC という場合は、この TOEIC® Listening & Reading Test を指すこととする。

TOEIC には、公開テストと IP テストの 2 種類がある。IP テストは Institutional Program の略で、団体受験用のテストであり、実施時間が 1 時間程度と公開テストより短く、紙の試験問題による受験だけでなく、オンライン受験もある。オンライン受験はコロナ感染症対策としても有効であると考えられる。

TOEIC 受験には合格・不合格ではなく、得点は 0~990 点のスコアで表示される。テストは 1 問 5 点という絶対評価ではなく、相対評価である。これはテストの難易度によるスコアの差が出ないように行われている処理である。²⁾

TOEIC テストは非公開であるため、スコアと正答数との関係は公開されていない。また、いわゆる過去問は出版されておらず、公式問題集であっても、過去に出題された問題ではなく、予想問題にすぎない。

TOEIC は 2022 年度大学入学試験においても、全国 788 大学のうち 236 校で活用されている。また、入学後の単位認定に活用している大学も多く、2021 年度の調査では全国 776 大学中 334 大学が入学後の単位認定に利用している。¹⁾ 本学も利用しており、例えば、400 点取得者には英語Ⅲの 1 単位の認定をしている。

2.2. 先行研究について

TOEIC の受験に関する対策本やインターネット上の動画は多種多様であり、その数は測り知れない。コロナ禍において、自宅での勉強時間が増えたためか、受験料を値上げしたり、受験者数を制限したりしている中でも、日本人のビジネス英語上達への意欲は衰えていないようである。海外留学や部活動ができない状況下で、就職活動の履歴書に実績として書くことが不足し、勢い、資格試験を受けようという学生が増加することも容易に予想できる。コロナ

禍で海外への渡航が難しい中でも TOEIC 受験は相変わらずの人気である。YouTube には TOEIC 対策が多数公表されており、例を挙げると、公式問題集 1 冊を 100 回やりなおす、リスニング問題をシャドーイングする、リスニングの音声 を 1.5 倍にして聴く、英文法をやり直す等、様々である。いずれも受験者個人をターゲットにしているものが多い。

大学向けの TOEIC 対策授業向け教材は多く、大学の授業で TOEIC 対策をしている例は多いが、研究成果を発表している例は多くはない。先行研究としては、国際センターやゼミナールで TOEIC 対策を担当した研究者からの報告がある。

山梨大学教育国際化機構の 2017 年紀要年報に、同大学交際交流センターが管理・運営している 3 つの英語学習支援事業「G-フィロス (グローバル共創学習室)」、「英語学習相談」「TOEIC®対策講座」を学生が利用することによって TOEIC® L&R スコアが伸びているかを検証した例があがっている。江崎 (2017) によると、利用者のうち TOEIC 試験を複数回受験した 28 名のスコアの推移を調べた結果、

「学習室や学習相談を利用している学生のほうが、利用したことのない学生よりスコアが伸びてはいるものの、利用回数とスコアの伸びはむしろ弱い負の相関を示している」そうで、中には「相談することが目的になってしまっている可能性も否定できない」という結果が報告されており、興味深い。また、同大学で株式会社アルクから派遣されたアドバイザーが担当する TOEIC®対策講座について言えば、「スコアの比較的高い学生は講座を受けない傾向にあること、スコアの比較的低い学生は対策講座受講によってスコアを伸ばすこと」が報告されている。²⁾

授業内の取り組みとしては、湘北短期大学総合ビジネス・情報学科の専門科目「ゼミナール」で TOEIC 対策を指導してきた報告が参考になる。山形 (2019) によると、初めての TOEIC 試験受験の際の得点が 200 点台後半から 300 点であった学生で、卒業時に 500 点のラインにたどりついた学生は数名にすぎなかった。山形は、効果的な学習につなげる指導法はないか模索するため、自らが TOEIC 指導者養成講座に参加することにした。その講座で、高得点を目指すには 3 つの力、すなわち、英語力・情報処理能力・TOEIC 受験力をトレーニングすることが必要だと気付いた。その後は、学生の個別シートを作って弱点を理解させ、「授業で苦手なパートが共通するグループを作り、パート別のグループワークの形で学習できる環境づくりに成功し」、³⁾ オンライン授業になってからも、個別指導を徹底し、得点アップにつながったという報告がなされている。⁴⁾

今回の研究はコロナ禍でのオンデマンド授業という特殊性の中で行われ、また、自ら科目選択をした学生ではなく、一般教養科目として受講した 1 年生を対象としたものである。同じような状況での、授業と TOEIC 得点力についての関係を研究した先行事例は見つけることは難しく、本研究で参照することができたものは以上であった。

3. 研究目的と方法

3.1. 共同研究の目的と意義

筆者が本学で職を得た 2018 年時点では、同一シラバスではあるものの、毎週の授業は同一教材・同一進度ではなく、教員それぞれが個性を活かして行っていた。英語教員と言っても多様な経歴・研究分野を持っており、その個性と知見を活かして学生を指導することには測り知れないメリットがある。しかしながら、同じ英語Ⅲという科目を受講していても、学科ごとに時間割が固定化されているため、教員を自分の意志で選ぶことはできないという状況の

中で、教員によって授業の難易度や進み具合に若干の差があることに対して不平等感や不満を持つ学生もいた。そこで 2021 年度から同一教科書を使い、同一進度で、指導を共同で行おうと 4 人の教員が授業を開始したのである。当初は、ほぼ全学生が 4 単位を取得するというカリキュラムに連続性や統一性を持たせて学生の要望に応えたいという気持ちが強かった。また、初めてオンラインによるオンデマンド授業を実施する教員側が協力することで、自分達自身の技術的な不安感を払しょくし、わかりやすい授業をすることが目的であった。2022 年度になると、さらに協力が進み、TOEIC 受験者を増やし得点力を向上させたいという大学側の要望に応える形で、どのような学生が TOEIC 模試の得点を伸ばすのか、同一の TOEIC 模試とアンケートを行って共同研究することとした。

3.2. 研究の方法

研究対象 本学 1 年英語Ⅲ受講者 11 クラス

研究時期 2022 年度前期 4 月 11 日から 8 月 4 日

使用教材 「Mastery Drills for the TOEIC® L&R Test: All in One Target 500」(桐原書店)

使用指標 上記教材添付「TOEIC® L&R ハーフテスト」100 問 リスニングセクション 21 分 49 題 リーディングセクション 39 分 51 題

提出方法 本学の英語授業で利用している Learning Management System の一つである manaba course で出題・解答入力（以下この論文では manaba と記載）

模試提出条件 TOEIC 公式試験 200 題の所要時間が 120 分であることから、今回の模試 100 題の試験時間は 60 分を目安とした。オンデマンド授業であるため、問題を印刷する、解答をメモするなどの時間を含み、解答時間は 80 分以内とした。また、リスニング録音時間が約 20 分であることから、20～80 分の時間制限を設け、この制限を守らなかった学生は授業出席とはするが、そのデータは分析から外すこととした。また、TOEIC 模試の点数が直接成績には反映されないことを授業の中で説明した。

アンケート 4 週目と 15 週目に上記 manaba course 上のアンケート機能を使って 17 項目のアンケートを行った。（本稿では 13 項目のアンケートのみ使用）表 1 参照
アンケート提出は出席には関係しないが、どのような学習法をとっている学生が TOEIC 模試の得点を伸ばすのかを研究したいので協力してくれるよう、学生にお願いした。（アンケート文面は論文の最後に資料として掲載）

研究 1 授業方法の比較

タイプの違う 2 つの授業を受けたクラスの学生の 1 週目と 15 週目の TOEIC 模試の得点を比べ、有意ある差が出るかどうかを調べる。

研究 2 学習方法の比較 1

学期に 2 回、アンケート（表 1）を実施し、TOEIC 模試で得点が大きく上昇した学生の学習方法に変化があったかどうかを調べる。

研究 3 学習方法の比較 2

学期に 2 回、アンケート（表 1）を実施し、5 段階のアンケート回答結果と TOEIC 模試の平均点を分析する。

4 週目と 15 週目に行った学習方法に関するアンケート回答は、「1 よく当てはまる 2 やや当てはまる 3 どちらとも言えない 4 あまり当てはまらない 5 まったく当てはまらない」の 5 段階とした（資料 1 参照）。

表 1 学習方法アンケート文面と略称

質問文	略称
① 英語の単語集や語句集を使っている	単語集
② わからない単語が出てきた時には辞書を引き	辞書利用
③ 知らない単語に出会った時は、まず、その単語の意味を文脈から推測する	文脈把握
④ 英単語を覚える時は、どのような状況で使われているのかに着目する	状況把握
⑤ 英単語は“im-possible” “un-able” のように接頭辞 (im-) や接尾辞 (-able) に分解して覚える	接頭接尾辞
⑥ 授業以外に TOEIC や英検のための学習をしている	資格試験
⑦ 英文の本や雑誌、新聞などを読んでいる	英語本雑誌
⑧ 英語授業用のノートを作っている	ノート作成
⑨ 英語の教科書は発音や強勢に気をつけながら音読している	音読する
⑩ 英語の学習では、間違えた問題についてその理由を分析するようにしている	間違い分析
⑪ SNS や CNN・NHK 講座などを利用して、生の英語に触れるようにしている	SNS・CNN・NHK 講座
⑫ 英語の文を読むときは、単語ごとではなく、語句のかたまりで意味をとる	語句のまとまり
⑬ 英語の歌を歌ったり、映画や TV を見たりしてフレーズを真似してみる	英語歌映画

4. 研究と考察

4.1. 研究 1 授業方法の比較

4 人の担当は同じ教科書を使用し、同じ進度で授業を進めてはいるものの、動画の配信回数や方法に差がある。また、解答配布の方法や時期にも違いがみられる。最も TOEIC 模試の伸びに効果が出る授業方法を模索するため、授業方法が大きく異なる 2 人の担当者の授業（授業タイプ A と授業タイプ B）を取り上げ、比較してみることにした。

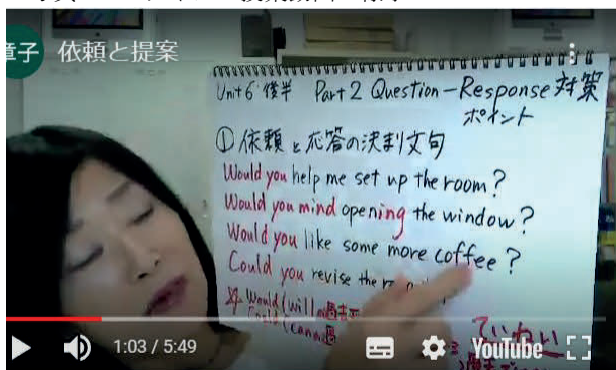
授業タイプ A

先に学習ポイントを動画で説明し、事前配布した全訳・解答・解説を使い、学生自身が教科書を学習し、自ら採点・復習した後に manaba 上の小テストを受けて提出させる。12 回の小テストの得点の差異は成績の 6 割に反映される。

受講生 英語Ⅲ 1 年生 3 クラス 76 名

受講生の特徴 比較的欠席が少なく、提出物の状況も良い。

■写真1：Aタイプの授業動画の様子



授業タイプAの授業内容

最初に送られてくる動画は10～15分程度の短いもので、授業の目標や学びのポイントを2～3点程度に絞って、スケッチブックにマジックの手書きで書いたものを使い(上記写真1参照)、教員が平易な言葉で理解を促し、学習の見通しを作り、学習意欲を向上させるものである。説明するポイントはおおまかにいうと2つに分かれる。一つ目は、より英語学習全般に必要なとされる「そもそも」にあたる、大きな概念に関するものである。「丁寧表現になぜ仮定法を使うのか」「品詞の紹介と働き」「動詞の9時制の紹介と使い分け」「音声におけるアクセントの重要性」「名詞と動詞に着目して聞く」「接頭辞・接尾辞で語彙が増える」等である。2つ目はTOEIC試験を受ける際のストラテジーを伝えることである。例えば、「あらかじめ予測する」「場面設定を数多く知る」「先読みの大切さ」「ビジネス英語でよく出る言い回し」等である。

授業タイプAの特徴

毎週の授業の最初に見る配信動画については、平易な言葉でポイントを解説するよう心がけ、課題を学習するための動機づけになるよう配慮して作成している。しかし、その後いざ一人で問題を解き、解答を確認し、採点し、小テストに答えるという長い学習過程を各自が行うには根気が必要である。動画視聴や教科書学習をしないで、いきなりmanabaの小テストにのみ答えて「出席を稼ぐ」ことも可能な設定となっていてところに弱点があり、教員の指示通りに、学生が自律的に学んでくれないと力がかからないという不安があった。

そのための予防策として、また、知識の定着のためにも、毎週の小テストの最後に、振り返り学習を取り入れている。例をあげると、「わかったことと、まだわからないことを書く」、「聞き取れなかった英単語とその意味を書き出す」、「自分が聞き取れない音はどんなものか説明する」、「なぜ間違えたのかを説明する」等である。また、学んだことを応用するための自由英作問題(例 長文読解問題の続きを書く・客からの苦情メールに支配人になったつもりで回答メールを書く)を出題することで、「英語学習はとにかく丸暗記し〇×をつけて採点すればよい」という安易な学習方法をとらないように指導した。

授業タイプBと比べると、正解を知った後の教員からのフィードバックが丁寧でないところに改善点があった。

授業タイプB

動画配信時間前にmanaba上で、教科書の問題を未習の状態ですべて「課題」として解かせ、提出させる。配信時間になると学生は課題の解説を視聴する。なお、

課題の中で難易度の高い問題については、写真2・3のように日本語でヒントを記した。課題の最後には解いた感想や不明点を書くコメント欄を設けた。

受講生 英語Ⅲ 1年4クラス 97名

受講生の特徴 課題の提出状況は概ね良い。資格試験で一定のスコアを取得し、授業免除をした学生が多かった。

■写真2：Bタイプのリスニング課題

⑦

Could you tell me 1.14 [] 1.15 [] to the station?

⑧

The train 1.17 [] 1.18 [] 1.19 [] for about 30 minutes.

ヒント;
時刻に注意!
「その電車は約30分間遅れたままの状態だ」が直訳になります。
別の機会でお話しますが、英語は日本語に比べ、時刻に関して非常にうまい言語です!

■写真3：Bタイプのリーディング課題

1. What kind of business is Curbel Corp.?

→この問題文から「ビジネス」に関すること、そしてCurbel社という会社名が出てくるところを探すと設問の解答に近づくことがわかります。

1.11

1. ☐ (A) A travel agency
2. ☐ (B) A research institute
3. ☐ (C) A consulting firm
4. ☐ (D) A software company

2. Where will the successful candidate's office be located?

→successful candidate officeがキーワードです。

1.12

1 ☐ (A) Canada

授業タイプBの授業内容

学生は教員が指定した箇所を自宅でしっかり予習をすることが前提であり、予習内容を確認しながら授業が進んでいく。この方法は対面式なら可能であるが、オンデマンドとなると難しく、別のやり方で学生の予習状況を把握しなければならない。そこであえて予習を「課題」として提出させることにした。これがタイプBの特徴である。この方法では、新たな学習内容を教える前に解くことになるうえ、それを提出しなければならないため、予習にそれなりの時間を要することになる。

動画は「5W1Hの疑問文の出だしを聴きとることができる」というふうに、各ユニットの目標を提示することから始める。授業の目的を明文化することで学生の意識もそちらに向かうからである。その後、課題の答え合わせを中心に進めていく。学生の解答を見るとわからない部分には個人差があるため、なるべく全ての問題に解説をつけている。扱った文法事項の詳しい説明、リスニングは聞き取りのポイントのスライドも時折取り入れ、教科書で不足している点を補っている。学生は解説動画を視聴し、自分の力でわからなかった問題を振り返る。動画は単に答え合わせだけ

に留まらず、派生語や日本語と英語のニュアンスの違いも言及する。会話で使えるような表現もピックアップする。

授業タイプ B の特徴

動画配信時点で、すでに各自が既習済であるので、動画のどこに集中すればいいか把握できるよう配慮している。何も教えない環境で教科書の課題を解くことは、学生自らが主体となってわからない箇所と向き合うことになる。そして予め「わからないこと」が明らかになっていれば、動画はその部分の解説に集中できるわけである。「わからない」で止まってしまうリスクを減らすことができる。さらに、「わからないこと」が「わかること」になって学生に自信を持たせることにもなり、モチベーションを高める効果も期待される。

ヒントを与えることは、英語を苦手とする学生への対応でもあった。苦手な学生は予習をすることに拒絶反応を見せる。実際に、課題を空欄で出す学生や、経過時間が数分という者もいて、こういった学生はどのクラスにも一定数いた。「解説も課題と一緒に載せてほしい」という学生の声もあったが、わからないことに耐え、自ら考えて正解を出す態度の育成を図る授業を組み立て、励ましながら授業を進めていった。

結果

前提として、授業タイプ A と B のクラスの学生に元来の英語力に大きな差がないかどうかを確かめるため、入学直後のプレースメントテストの成績を比べてみた。授業タイプ A のクラス（人数 76 名）授業タイプ B のクラス（人数 97 名）の概要を表 2 で示す。

表 2 入学時のプレースメントテストの比較

	授業タイプ A	授業タイプ B
人数	76	97
平均	72.3	71.0
最大値	92	94
最小値	60	60
中央値	72	70
最頻値	70	72
標準偏差	8.07	7.89
分散	65.07	62.23

入学時のプレースメントテストは、入学生の英語力により 3 段階のクラスに分けるためのテストであり、同じ英語Ⅲに分けられた研究対象学生は、表 1 で改めて示されたように、学部差を考慮しつつも、英語の学力はほぼ均等に分けられたと言える。

1 週目と 15 週目に TOEIC 模試を行った結果、表 3 で示すように、授業タイプ A、B とともに平均点はほぼ同程度上昇した。TOEIC 公式試験では 1 問何点かの配点は非公表となっているが、1 問 1 点 100 点満点で 2.8 点の伸びであるので、TOEIC 公式試験では、1 問 5 点の 990 点満点で、便宜上予想計算すれば、双方とも約 30 点の上昇となる。

表 3 を見てみると授業タイプ A、B とともに人数が減っている。1 週目と 15 週目の TOEIC 模試を提出しなかったり、制限時間を守らなかったりした学生をデータから外したためである。また、授業タイプ B のクラスに、入学前から TOEIC スコア 700 点以上を持っており、1 週目に 100 点中 90 点を取った学生のデータは、目標 TOEIC スコア 300 点のクラスにおいては「外れ値」という扱いとすることで分

析から省いた。

表 3 1 週目と 15 週目の TOEIC 模試の平均点の比較

	1 週目平均点	人数	15 週目平均点	人数	得点の伸び
授業タイプ A	37.1	68	39.9	57	+2.8
授業タイプ B	35.1	72	37.8	64	+2.7

それでは、2 種類の授業方法に差が出たのか調べてみる。

まず、1 週目の授業タイプ A と授業タイプ B のクラスの TOEIC 模試の結果を「等分散を仮定した 2 標本の t 検定」をした結果、有意な差は見られなかった ($p=.09$)。同様に、15 週目の模試結果の「等分散を仮定した 2 標本の t 検定」を行った結果も有意差があるとは言えなかった ($p=.15$)。

次に、1 週目と 15 週目の TOEIC 模試を 2 回とも受けている標本のみを対象に「等分散を仮定した 2 標本による t 検定」を行ったところ、1 週目 ($p=.27$) および 15 週目 ($p=.20$) も 2 標本に有意な差は見られなかった。授業タイプ A と授業タイプ B のクラスの学生の TOEIC 模試の得点に大きな差はなかったと言える。

最後に、授業タイプ A と授業タイプ B それぞれのクラスの伸びを見てみる。1 週目と 15 週目を両方受けた学生のみに絞って 1 週目と 15 週目の「一対の標本の t 検定」を行った。授業タイプ A では、 $t(54)=-2.11$, $p=.019$ となり、有意な差が見られた。授業タイプ A については、明らかに授業の効果があつたと言える結果となった。授業タイプ B では $t(53)=-1.15$, $p=.12$ となり、有意な差は出なかった。

この「一対の標本の t 検定」の結果を確認するために、それぞれのクラスの 2 回とも受験した学生に絞って平均点を比べてみると、表 4 で示すように、授業タイプ A は B より得点の伸びが 0.8 高かった。人数を見ると、授業タイプ B のクラスの学生の中で、授業の履修を取り消したり、1 週目または 15 週目を休んだり、時間制限を守らなかったりした数が、授業タイプ A より多かったと言える。

表 4 1 週目と 15 週目を両方受けている学生のみに絞った TOEIC 模試の平均点の比較

	1 週目平均点	15 週目平均点	人数	得点の伸び
授業タイプ A	37.5	40.1	55	+2.6
授業タイプ B	36.5	38.3	54	+1.8

さらに、授業タイプ A の 1 週目と 15 週目の TOEIC 模試の得点に有意な差があることを確認するため、1 週目と 15 週目の TOEIC 模試の得点のヒストグラムを作成し、比較してみた。授業タイプ A の学生は、全体的に得点が引き上げられ、特に上位層の得点が伸びていることがわかる。（資料 2 図 21・22 参照）

考察

授業タイプ A と B の 2 回の TOEIC 模試の数値上の差異がなかったにも関わらず、授業タイプ A にのみ授業の効果があつたという結果になったのは何故か。個別の得点を細かく見てみると、授業タイプ B のクラスの学生間の学力の差が大きいことに気づく。また、個人の 1 週目と 15 週目の得点の振れ幅が大きいことが言える。得点を大幅に上げた学生もいるが、大幅に下げた学生もいた。

一方、授業タイプ A のクラスでは、出席状況が比較的良好で、学習が安定し、突出してできる学生は少ないが、後

述資料2の図19と20のヒストグラムの差を見ても明らかのように、学期の前後でクラス全体が伸びてきたことがうかがえる。

授業構成や内容について言えば、授業タイプBと比べ、Aでは教科書学習は学生の自学自習に頼るところが大きい。解答を先渡しし、動画の視聴時間も短く、提出する問題の量も少ない。このような理由から、力がつかない可能性もあるのではないかと心配したが、予想より良い変化が出る結果となった。その理由を探してみると、教師が動画ビデオに顔を出して安心感を与え、授業のポイントを分かりやすく説明し、学生の「できそうだ」という学習意欲を引き出すことにより、自律的学習を促した可能性がある。また、小テストの最後に「振り返り」をすることにより、一見すると一過性の問題に見える教科書や小テストの問題にも、英語学習者としてはもちろん、社会人になってからも使える「深い」意味があることに気づき、「よい成績を取りたい」気持ちだけでなく、「やらないと損」という積極的な態度も引き出したと言えるのではないかな。

4.2. 研究2 学習方法の比較1

20点以上上昇した学生5人の学習方法の変化

TOEIC模試で1週目に比べ15週目に20点以上得点上昇した学生の、学習法に関するアンケート結果を5例示す。青が1週目、赤が15週目である（大幅に上昇した例を20点以上UPとした客観的根拠はないが、990点満点の公式試験で200点近くUPしたとみなすことができるため）。

図3から7については、グラフを見やすくするため、資料1のアンケートの回答と逆転させ、「5 よく当てはまる 4 やや当てはまる 3 どちらとも言えない 2 あまり当てはまらない 1 まったく当てはまらない」の5段階の図として表示する。

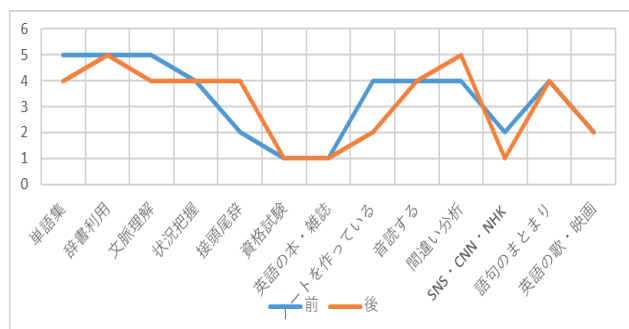


図1 得点が20点以上上昇した学生Aの学習法の変化

この学生はもともと、単語集や辞書を使い、文脈を意識して学習してきた学生であるが、自ら資格試験を受けたり、英語の本や雑誌、新聞を読んだり、SNS/CNN/NHKなどの利用をしたりはしないタイプである。授業を中心に英語学習してきたタイプと推測できる。学期終わりの15週目のアンケート結果を見ると、間違いを分析し、接頭接尾辞を意識して覚えるようになったことが、TOEIC得点の向上につながったと考えられる。

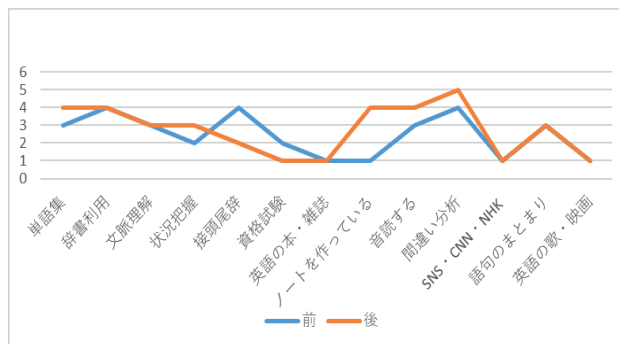


図2 得点が20点以上上昇した学生Bの学習法の変化

学生Bは、単語集の利用や間違い分析、状況把握の項目が伸びている。そして、最も変容したのが、ノートを作成するようになったことである。これらは、教員が授業で奨励してきたことであり、学生が教員の指導に応じてくれたことがうかがえる。

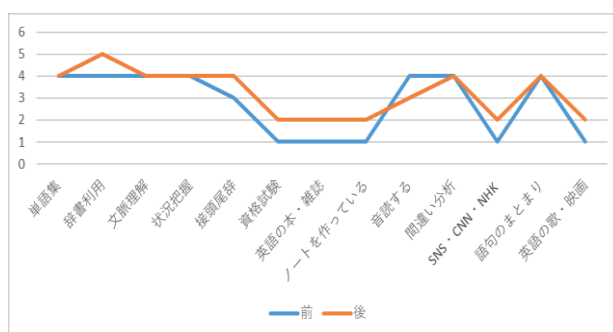


図3 得点が20点以上上昇した学生Cの学習法の変化

同じように20点以上得点を伸ばした学生Cの学習法の変化を見ると、13項目中7項目で変化しており、全般的に底上げされたことが上昇の要因になっていると考えられる。

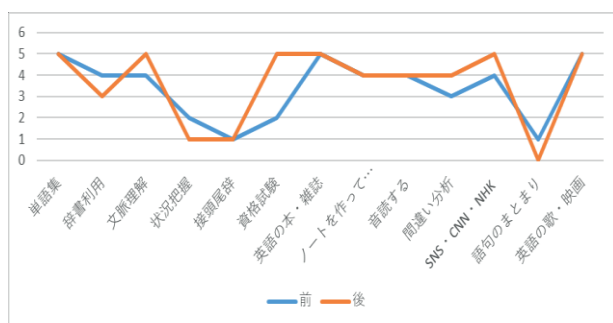


図4 得点が20点以上上昇した学生Dの学習法の変化

学生Dは大学入学を機に、資格試験を意識していることがわかる。TOEICを明確にいつ受けるかが決まっていなくても、受験することが自分にとってプラスになると考え、受験勉強から資格試験型の勉強法へと転換したと言えよう。それは単語を暗記することも大切だが、文脈から文章を理解しようとする項目が伸びたことから明らかである。大学入学という目標が達成され、受験時の実力を保つことは難しい。多くの場合、入学時がピークで段々と下降してしまうのが現状だ。そうさせないために学生Dは資格試験という新たな目標を掲げ、その結果得点が伸びたのではないだろうか。

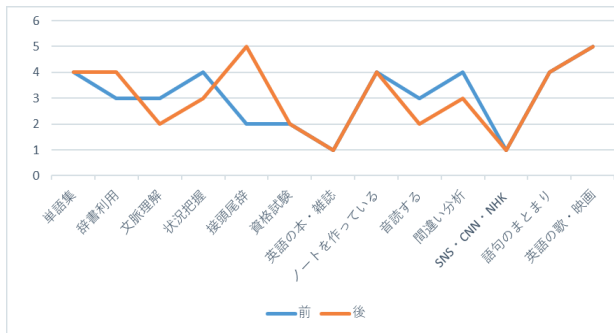


図5 得点が20点以上上昇した学生Eの学習法の変化

学生Eはもともと英語の歌や映画・TV番組に興味を持ち、演技者の発するフレーズを真似してみるような学生である。さらに担当教員からの助言で、派生語や接頭辞接尾辞について学ぶことで、語彙を増やし、得点を上昇させることがうかがえる。興味深いのは、英語の歌や映画・TVは活用するが、他のメディアの利用はしていないことである。自分の興味あるものが英語を勉強するモチベーションに繋がったのではないだろうか。

考察

TOEIC模試を2回受験し、20点以上得点を伸ばした5人の学生の、学習方法アンケートにおける学期始めと学期終わりの差を吟味してみると、学生それぞれの個性が見えてくる。同時に、教員からの授業中の指導を受け入れ、学生が変容した様子がよく伝わってくる。教員に対し、自分の好感度を上げようとした可能性を疑う見方もあるかもしれないが、成績には影響のないアンケートであることを事前に知らせているので、学生が事実でない回答をしたとは考えにくい。

本稿では5名を紹介するにとどまったが、164人中11名の学生が100点中20点以上の大幅なスコアアップをした。1週目の得点上位層がさらに15週目に得点を伸ばしている例が大半であるが、中には、上記学生CとEのように、1週目のTOEIC模試では平均点以下だった学生が、15週目に平均点を大幅に上回った例もある。この学生がどのような経緯で学習を進めるようになったかを、さらにインタビューを含めた質的研究で分析することも意味があると考ええる。

4.3. 研究3 学習方法の比較2

13項目の学習法と15週目のTOEIC模試平均点との関係

さらに、全体の傾向をみるため、アンケートを提出した学生152名のアンケート結果とTOEIC模試の平均点を調べてみる。研究前に、教員たちが得点アップに効果的ではないかと予測していた項目のうち、例えば「ノート作成」や「音読」は見事に予想がはずれ、それほど効果的とは言えなかった。また、リスニング上達に効果的と一般に思われている、「英語の歌・映画・TV」「SNS、CNN、NHK講座」などの項目について、当てはまると答えた回答が予想より少なかった。生の英語に触れている学生が思いのほか少ないことにも驚かされた。

① 英語の単語集や語句集を使っている

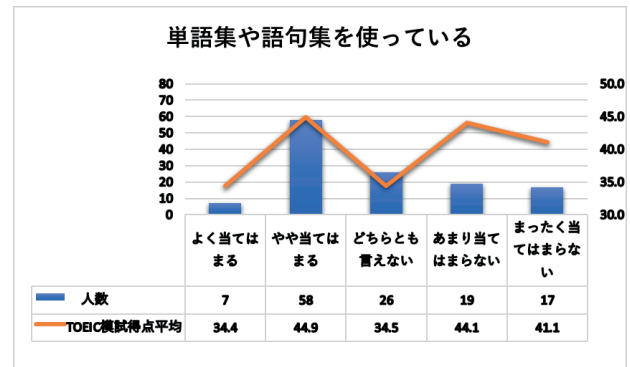


図6

単語集をよく使う学生は、使わない学生よりTOEIC模試の得点が低い傾向がある。紙の単語集の代わりに携帯アプリのようなものを使っていると読み取ることもできるが、再度調査の必要がある。

② わからない単語が出てきた時には辞書を引く

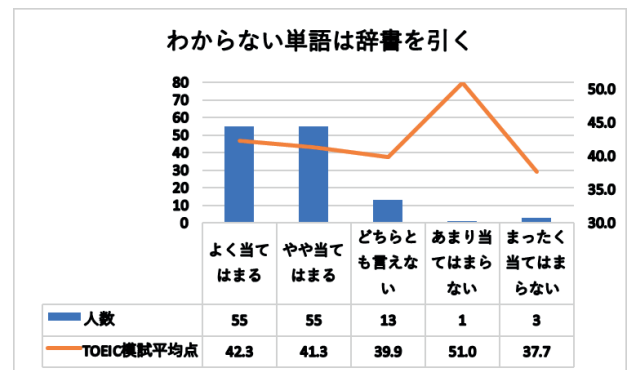


図7

辞書を引いている学生が150名中128名で大半である。高校の教科書には新出単語の意味が掲載されているものもあり、辞書を引く習慣のない学生もいるようなのだが、この結果に安堵した。あまり辞書は引かないが、最高点をあげた学生が一人いるのでグラフは極端な形をしているが、辞書を引く学生は、引かない学生に比べ、得点を伸ばしている傾向のようだ。まったく辞書を引かない学生が4名いるが、得点は低い。

③ 知らない単語に出会った時は、まず、その単語の意味を文脈から推測する

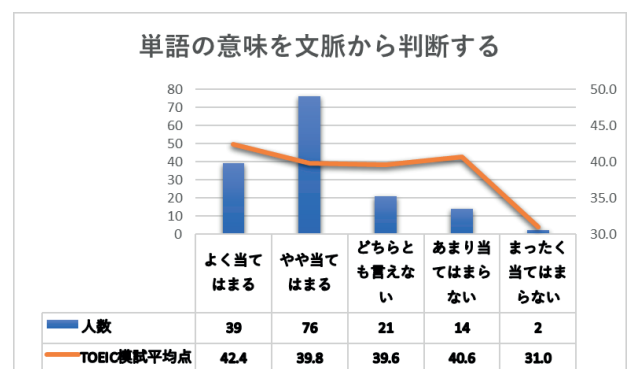


図8

知らない単語に出会った時、150 名中 115 名は「文脈から判断する」と答えている。グラフラインを見ても、ほぼ適切なストラテジーと言えるのではないかな。

- ④ 英単語を覚える時は、どのような状況で使われているのかに着目する

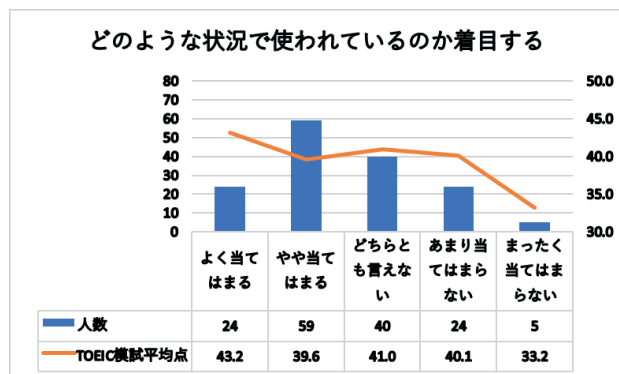


図 9

比較的なだらかにグラフラインがでており、「よく当てはまる」と「まったく当てはまらない」の差が 10 点あり、差が歴然としている。TOEIC では、流れたり書かれたりした英文の場面・状況を一瞬にして把握しなければならないため、高得点を得ている学生は、この「英単語を覚える時は、どのような状況で使われているのかに着目する」ことをかなり意識しているようだ。

- ⑤ 英単語は“im-possible” “un-able” のように接頭辞 (im-) や接尾辞 (-able) に分解して覚える

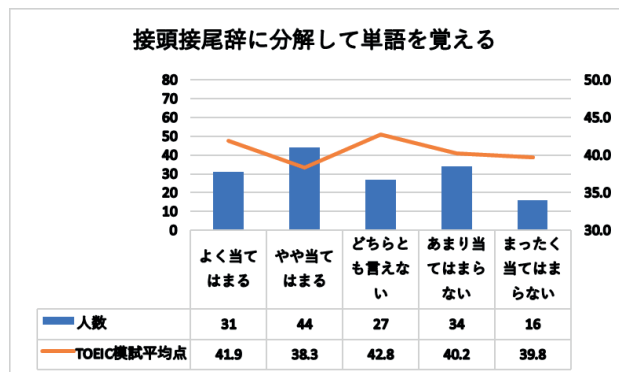


図 10

ほぼ横ばいである。「どちらとも言えない」が高得点を示しており、分析が難しい。

- ⑥ 授業以外に TOEIC や英検のための学習をしている

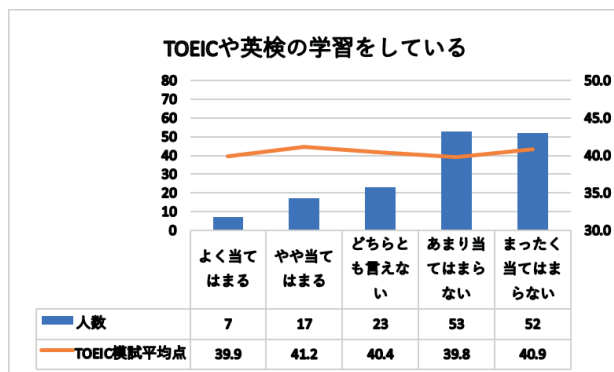


図 11

授業以外に資格試験の学習をしている学生は 152 人中 22 人程度で予想より少ない。その学生たちも、資格試験の学習をしているのに関わらず、TOEIC 模試の結果は、していない学生と変わらない。

- ⑦ 英文の本や雑誌、新聞などを読んでいる

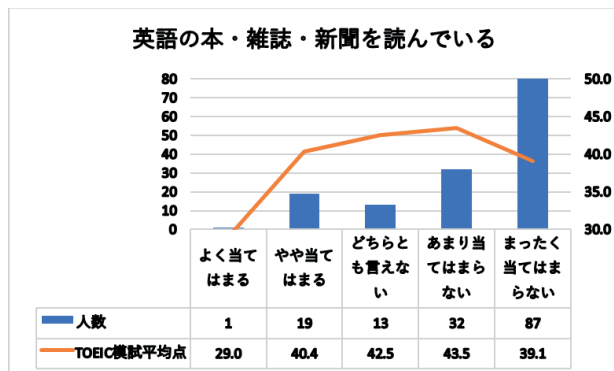


図 12

そもそも英語の本・雑誌・新聞を読んでいる学生が少ないため、読むことと TOEIC 模試の得点との関係は出ていないように見える。よく当てはまると答えた学生がたった一人のため、一人の得点が大きく反映されてしまった。

- ⑧ 英語授業用のノートを作っている

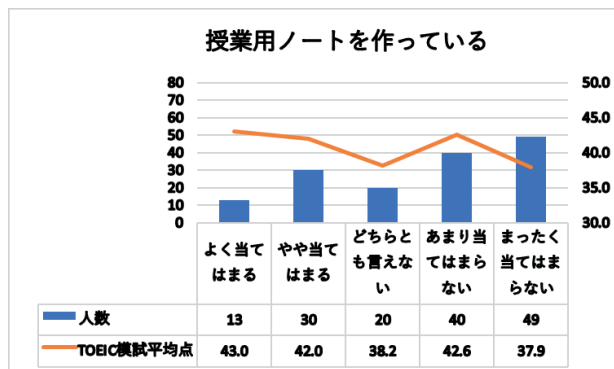


図 13

ノートを作成するよう指導している教員もいるが、PC で代用している学生も多く、全体としては、ノートを作っていない学生のほうが多いことがわかる。「よく当てはまる」と「あまり当てはまらない」がほぼ同じ TOEIC 模試の

得点をあげている。

- ⑨ 英語の教科書は発音や強勢に気をつけながら音読している

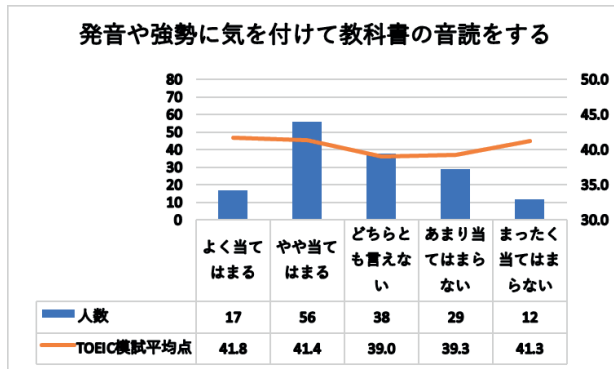


図 14

教員は「発音や強勢に気を付けて教科書の音読をする」と呼びかけており、音声ファイルの添付された教科書を採用しているのだが、音読と TOEIC 模試の得点との相関関係は証明できなかった。

- ⑩ 英語の学習では、間違えた問題についてその理由を分析するようにしている

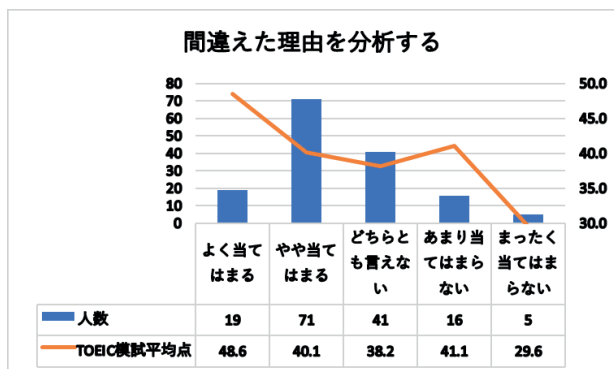


図 15

「間違えた理由を分析している」学生の得点は最も高い数値となっており、「よく当てはまる」と「まったく当てはまらない」の得点差も最大の 19 点となっている。グラフラインから見て最も重要な要因と考えられる。

- ⑪ SNS や CNN・NHK 講座などを利用して、生の英語に触れるようにしている

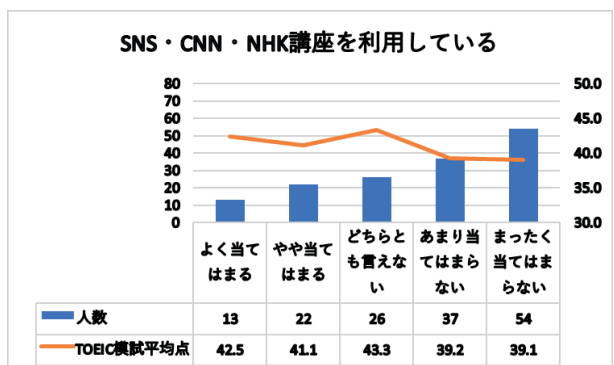


図 16

「どちらとも言えない」が最も得点が高い。様々なメディアを使える時代だが、生の英語に触れている学生は少ないことがわかる。

- ⑫ 英語の文を読むときは、単語ごとではなく、語句のかたまりで意味をとる

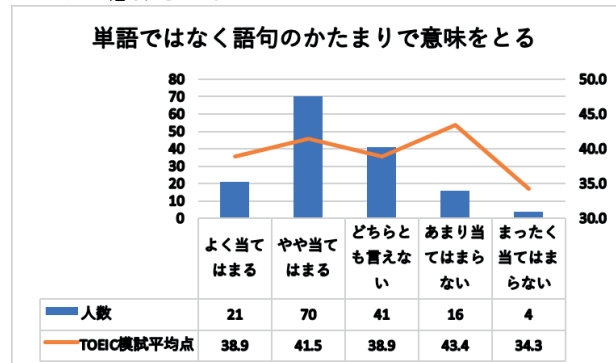


図 17

速読対策には欠かせないと言われている「単語ではなく語句のかたまりで意味をとる」の学習法に対しても、「あまり当てはまらない」が高得点を取っているため、有効な方法とは言えないようだ。

- ⑬ 英語の歌を歌ったり、映画や TV を見たりしてフレーズを真似してみる

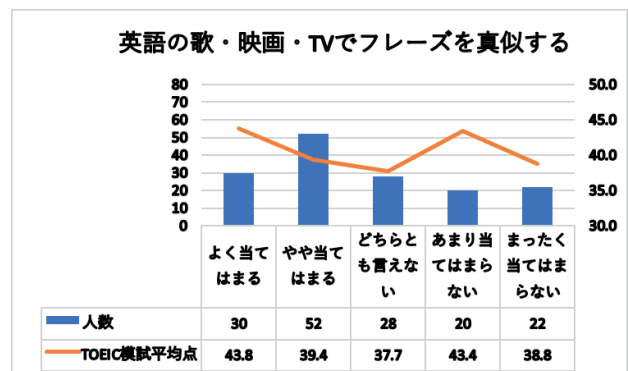


図 18

この項目も山が二つでき、「英語の歌・映画・TV で英語のフレーズを真似してみる」ことが、必ずしも TOEIC 模試の得点 UP に関係しているとは言えないことがわかる。

考察

学習法アンケートから見てきた、明らかに効果があると思われる項目は、⑩「英語の学習では、間違えた問題についてその理由を分析するようにしている」であった。今回のアンケート調査は英語の学習方法全般について聞いているものではあるが、日々の授業はもとより、TOEIC 対策としても、自分の間違いを分析することの有効性が示されたことになる。TOEIC では、基礎的な文法事項を確認する問題が多く、過去問と類似した問題がしばしば出題される。自分の間違いを分析し、同じ間違いをしないように類題に備えることは有効な戦略であろう。

さらに見てみると、④「英単語を覚える時は、どのような状況で使われているのかに着目する」も比較的有效な戦略であるという結果となっている。単に棒暗記するのではなく、場面設定や登場人物たちの人間関係などの

背景に着目しておくことは、TOEIC 問題を解く際にも有効であろう。TOEIC のリスニング問題や読解問題でも、瞬時に状況を把握する能力が求められる。

②「わからない単語が出てきた時には辞書を引く」と③「知らない単語に出会った時は、まず、その単語の意味を文脈から推測する」も、よく当てはまると答えた学生の TOEIC 模試の得点と、まったく当てはまらないと答えた学生の得点差が大きく、比較的有効だということがわかる。これらの項目も教員側から見れば、当然の結果となった。

予想外であったのが、⑥「授業以外に TOEIC や英検のための学習をしている」と答えた学生と、学習をしていない学生の TOEIC 模試の得点が変わらなかった点である。週 1 回の授業だけで、TOEIC の学習を行っている学生と対等な得点力を上げられるとは通常は考えづらい。授業以外で TOEIC 準備学習をしていても、そう簡単には成果が出ないということではないか。アンケートに学習の内容や頻度を書いてもらう空所を加えることも必要であったのかもしれない。TOEIC や英語検定試験の受験を考えている学生へのチュータリングのような個別支援のさらなる必要性も感じる結果となった。

⑨「英語の教科書は発音や強勢に気をつけながら音読している」や⑩「SNS や CNN・NHK 講座などを利用して、生の英語に触れるようにしている」のような項目の有効性については、リスニング問題だけに絞って分析すれば別の結果が出たのではないかと推測する。今回使用した TOEIC 模試では測ることはできなかったが、スピーキング力向上には有効な方法であると考えられる。

5. まとめと課題

コロナ禍のオンデマンドによる模試の実施は管理が難しく、公式試験のような、公正で正確なデータが取れたとは言い難い。TOEIC 模試のスコアやアンケート調査は成績に入れないということを知らせていることもあり、提出しない学生や、時間制限を守らなかった学生が出て、かなりデータ数が減ってしまったことも残念である。授業タイプ A、B 共、TOEIC 模試 100 点中 3 点近く正解を増やしたものの、この結果は教員側の期待を下回るもので、TOEIC 試験の難しさや週 1 回のオンデマンド授業の限界を痛感する結果となった。

一方で、20 点以上上昇させた学生が 164 名中 11 名出たことはそれなりの成果であろう。各教員が授業で強調したストラテジーを使い、得点を上昇させた学生がいたことは、教員にとって、授業のやりがいを感じる結果となった。

アンケート結果と TOEIC 模試との関係については、項目ごとに興味深い結果となった。項目相互の相関関係も一応調べてみたが、特筆するほどの相関は見られなかった。データ数が少ないからなのか、学生の英語力を調べる指標として、特に英語が苦手な学生には TOEIC 模試はふさわしくなかったからなのか、さらなる分析が必要である。平均点以上の学生だけに絞って分析してみることもできたのではないかと考える。また、アンケートの文面が具体的ではないので、本人なりの基準で答えている点も客観性という点で限界といえるであろう。

今回のアンケートで有効なストラテジーと示された「英語の学習では、間違えた問題についてその理由を分析する」や「英単語を覚える時は、どのような状況で使われているのかに着目する」などに関する活動を、来年度からの対面授業にさっそく取り入れていきたいと教員間で話し合っている。

今回の論文では紙面の都合で紹介できなかったが、アンケートの後半には学生の TOEIC や英語検定試験の受験経

験を聞く質問があり、その経験をどう感じたか、受けた経験をその後の英語学習にどう活かしたかを聞いており、教員による受験後の振り返りや本人の結果を受け止める姿勢が、その後の受験に影響を与えることがうかがえるので、受験後のフォローアップ指導という観点での研究にも取り組む価値がありそうである。

最後に、今回の研究に協力してくれた多くの学生のために、この研究で得た知見を明日からの日々の授業に活かすことを誓い、この論文を終える。

謝 辞

入学時のデータをいただいた IR 企画推進室の皆様、データ分析のご指導を何度もいただいた、情報工学科専門教育講師の段王れい子先生に心から感謝申し上げます。

資料 1 アンケート文面

あなたのこれまでの英語の学習方法について質問をします。以下の 5 つの選択肢からあてはまる番号をクリックしてください。

① 英語の単語集や語句集を使っている

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

② わからない単語が出てきた時には辞書を引く

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

③ 知らない単語に出会った時は、まず、その単語の意味を文脈から推測する

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

④ 英単語を覚える時は、どのような状況で使われているのかに着目する

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑤ 英単語は“im-possible” “un-able” のように接頭辞 (im-) や接尾辞 (-able) に分解して覚える

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑥ 授業以外に TOEIC や英検のための学習をしている

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑦ 英文の本や雑誌、新聞などを読んでいる

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑧ 英語授業用のノートを作っている

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑨ 英語の教科書は発音や強勢に気をつけながら音読している

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑩ 英語の学習では、間違えた問題についてその理由を分析するようにしている

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑪ SNS や CNN ・ NHK 講座などを利用して、生の英語に触れるようにしている

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑫ 英語の文を読むときは、単語ごとではなく、語句のかたまりで意味をとるようにする

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

⑬ 英語の歌を歌ったり、映画や TV を見たりしてフレーズを真似してみる

- 1 よく当てはまる
- 2 やや当てはまる
- 3 どちらとも言えない
- 4 あまり当てはまらない
- 5 まったく当てはまらない

3 あなたの英語の学習経験についてお聞きます。

⑭ 高校3年生の時、選択科目も含めて英語の授業は週何回ありましたか？数字でお答えください。

（入力必須）

⑮ あなたはこれまでに TOEIC（I P も含める）や英語検定を受験したことがありますか？

- 1 はい
- 2 いいえ

⑯ 4 ではないと答えた方にのみ質問します。受験してどのように感じ、その後の学習に活かししましたか？差し支えなければ結果等も含めてお答えください。

⑰ 本学では TOEIC（400 点以上）や英検（準2級以上）の資格取得により、英語科目の単位認定となります。（詳しくは履修 Guide Book を参照）今年度あなたは TOEIC 試験を受験する予定がありますか？

- 1 はい
- 2 いいえ

資料 2

授業タイプ A の学生の TOEIC 模試の伸び

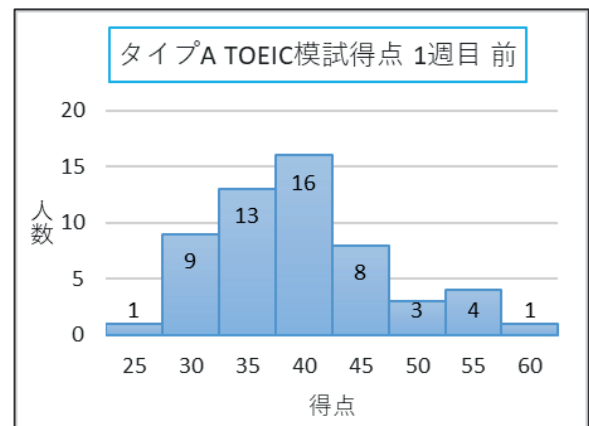


図 19

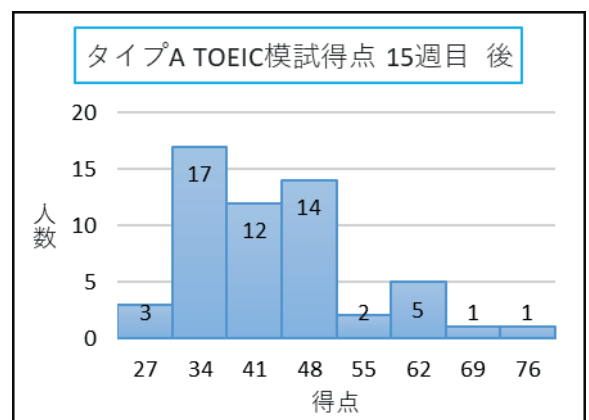


図 20

参考文献

- [1] IIBC 「TOEIC Program」
https://www.iibc-global.org/toeic/toeic_program.html
- [2] 江崎哲也：TOEIC[®]L&R スコアを伸ばす学生の学習スタイル -山梨大学 G-フィロス、英語学習相談、TOEIC[®] 対策講座利用状況との相関-，山梨大学教育国際化推進機構紀要年報, pp.56-61, (2017)
- [3] 山形俊之: TOEIC[®] Listening and Reading テスト高得点取得を目指した学習指導法～TOEIC[®] L&R テストスコアアップ指導者養成講座での学び～，湘北紀要第 40 号、pp.29-47. (2019)
- [4] 山形俊之: Abilities Measured を活用した TOEIC[®] Listening and Reading テストスコアアップトレーニングの実施結果報告，湘北紀要第 42 号、pp.93-114. (2021)

研究推進機構運営会議

議長 脇田 敏裕

構成委員 石田 裕昭

小池あゆみ

上平 員丈

高橋 勝美

星野 潤

井上 哲理

岡崎 美蘭

一色 正男

山家 敏彦

新田 晃司

山口 淳一

黄 啓新

兵頭 和人

三枝 亮

井藤 晴久

栗原 誠

高村 岳樹

井上 秀雄

塩川 茂樹

神奈川工科大学研究報告

A-47 人文社会科学編 通巻 47 号

令和 5 年 3 月 1 日 発行

編集兼発行者 神 奈 川 工 科 大 学

〒 243-0292 神奈川県厚木市下荻野1030

電 話 046-241-6221

印 刷 者 株式会社スクールパートナーズ

当該研究報告に掲載された論文の著作権は本学に帰属する。